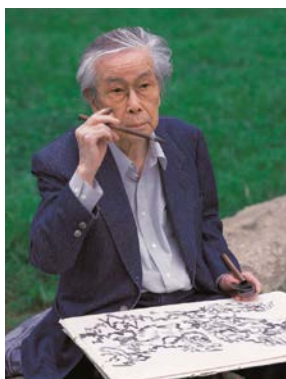


作家の肖像

第 13 回

このコーナーでは、
毎回一人の作家を取り上げ、
美術評論家の酒井忠康先生に、
お話をうかがいます。



1912-2007
高山辰雄

たかやま・たつお
1912年大分県生まれ。日本画家。
東京美術学校(現 東京藝術大学)
在学中より同校教授の日本画家・
松岡映丘に師事。34年に「湯泉」
が帝展初入選。46年に「浴室」、
49年に「少女」が日展特選。82年
文化勲章受章。83年大分市名誉
市民に推挙。95年パリで高山辰
雄展を開催。2007年 95歳で死去。

もの静かな佇まい

日本画家・高山辰雄との出会いは、
1967年に遡ります。私が勤めていた
美術館で高山さんの展覧会(※)が開か
れたときのことです。ただ、このと
きは、それほど親しくお話をするこ
とはなかった。だから思い出される
のは、その紳士的でもの静かな佇ま
いばかりです。

ところが、展覧会後に寄贈された
一つの作品を通して、私は高山さん
に惹かれていくことになります。そ
の作品とは、代表作「夜」。当時、日本
画への関心が薄かった私ですが、幾
度も目にするうちに、自分の中に感
動が焼き付けられていったのでしょ
うか。深い時間と空間の中に引き込
まれるようなおもしろさと新鮮さを
この作品に感じるようになった。こ
れは、私に日本画への興味をひらか
せてくれた作品なのです。

その後、もう一度、高山さんの展
覧会に関わる機会を得たものの、残
念ながら個人的なお付き合いをもつ
には至りませんでした。だから、高
山さんは、私の中ではいまだに遠く
にある存在のままです。

日本画の中に答えを求めて

「日本画は、敗戦後の現実世界を
描くのには向かない」。戦後、そう
した考え方が広がった時期がありま
す。装飾と様式によって美化された
世界を描く日本画には、いうなれば
人間の問題意識というものが何ら反
映されていないのだ、と。

高山さんは、日本画家でありなが
らこのことを克服しようとした、数
少ない現代的な画家でした。そして、
日本画の世界の中に身を置いたまま、

その難問題と向き合って、自分なり
の答えを出そうとしたのです。日本
画を投げ捨てて、外の世界に向かう
ことができたのにもかかわらず。こ
こに、日本画家・高山辰雄の“人”
と“芸術”の軌跡があると、私は考
えます。

澄明な世界へ

高山さんは、非常に思索的な人で
した。自分の内面にある衝動に耳を
澄ませて、内側から作品をつくった。
「表現する」ということには、考え
たことを整理して見える形にすると
いう側面がありますが、高山さんは
違った。考えようとして、わかろう
として表現し、そしてどんどんわか
らなくなっていったのではないか。
私にはそう思えてなりません。

高山さんはしかし、自分の心の内
奥にあるそうしたものを、そのまま
に表現しません。それを徹底的にコ
ントロールして、澄明な世界に昇華
させることができる。それが私の心
を惹きつけるものであり、高山辰雄
絵画の本質であるのかもしれません。
亡くなる1年前に描かれた自画像
「自寫像二〇〇六年」は、その境地
に達しているといえます。

未解決の世界をさまよって、最後
まで完結しなかった。それが、高山
辰雄という人なのです。(談)

※「香月泰男・高山辰雄展」(1967年)
東京美術学校時代の同期である
洋画家・香月泰男と高山辰雄の二人展。
神奈川県立近代美術館 鎌倉にて開催。

酒井 忠康

さかい・ただやす
世田谷美術館館長、美術評論家。
1941年北海道生まれ。慶應義塾大学卒業。
神奈川県立近代美術館館長を経て現職。
光村図書中学校『美術』代表著者。

著作権の関係で、
ウェブサイトでは
作品を掲載できません。

右「自寫像二〇〇六年」
紙本彩色 142×77cm 2006年
2006年に自宅で倒れて骨折後、そのリハビリを続ける日々の中で
描かれた作品。画家初めての自画像。

著作権の関係で、
ウェブサイトでは
作品を掲載できません。

左「夜」

紙本彩色 218.5×136.5cm 1963年 神奈川県立近代美術館蔵
旅先で見かけた一人の女性がじっとしゃんでいる姿に、
人間が背負わざるをえない孤独を感じ、
その記憶をもとに作品を制作したといわれる。

著作権の関係で、
ウェブサイトでは
作品を掲載できません。

上「由布の里道」

紙本彩色 216×146cm 1998年 大分県立美術館蔵
帰郷した折に立ち寄った湯布院の金鱗湖周辺を描いた。
本作をはじめとし、故郷・大分の原風景を舞台とした作品も残す。

information

日本画家・高山辰雄の回顧展が開催されます。

人間・高山辰雄展 ——森羅万象への道——

大分県立美術館の所蔵作品を核として、過去
最大規模の約120点を集め、70余年にわた
る高山辰雄の画業を回顧する展覧会。

場所 ◆大分県立美術館(大分市)

会期 ◆2018年7月7日～8月19日

開館時間 ◆10:00～19:00(最終入館18:30)

※金曜日・土曜日は20:00まで
(最終入館19:30)